

## バウハウスに関する論考 その5 バウハウスとブルーノ・タウト

終身会員 ○ 田 中 辰 明\*

バウハウス                      ブルーノ・タウト                      ヴァイマル共和国  
ドイツヴェルクブ                      少林山達磨寺                      タウト学校  
ンド

### はじめに

筆者は何回かヴァイマル、デッサウ、ベルリンのバウハウス関係施設を訪問したことがある。学芸員に「ブルーノ・タウトはバウハウスと関係があったのか？」と質問すると、ある学芸員は「タウトはバウハウスで講義をしたこともないし、関係はなかった」という回答を得た。またある学芸員は「タウトはドイツヴェルクブンドで、グロピウスと交流があったのでタウトの影響はグロピウスを通じてバウハウスに入っている」と説明してくれた。ではどちらの見解が正しいのであろうか？

### 1. ドイツヴェルクブンドを通じての関係

タウトもグロピウスを尊敬しており、1934年11月3日の日記に「グロピウスの現在の事情を思いやると、彼を日本に招くことができたらという気持ちが募ってくる。とにかく彼は、外廊式高層共同住宅の創始者なのだ。」と記している。(グロピウスはタウトと殆ど同時に、ナチスの圧迫を逃れてロンドンに亡命(1933年)し、後米国へ亡命した。1937年)

### 2. バウハウス宣言

グロピウスは1919年に「共に作り上げよう、未来の新しい建築を。それは全て同一の形態をとるであろう。建築も、彫刻も、絵画も」としてバウハウス宣言をあげている。この表紙はライオネル・ファイニンガーの木版画が用いられているが、これはブルーノ・タウトが著した「都市の冠 (Stadtkrone)」の表紙のゴシック建築と酷似している。

### 3. ブルーノ・タウトのバウハウスに於ける講演

参考文献 1~3 は可成り詳しくバウハウスについて記述された文献である。しかしブルーノ・タウトがバウハウスで講演をしたことには触れていない。有名な建築家がバウハウスで講演をすると関係者によりポスターが作られ、講演の告知が行われた。例えば、1926年2月26日(金)に行われたハンス・ペルツヒ (Hans Pölzig) のポスターはヘルベルト・バイヤー (Herbert Bayer, 1900~1985) によって作られ、ポスターそのものも有名になった。しかしタウトの講演についてはポスターは作られなかったか、記録が残っていない。2017年に発行された文献 7 によると、Mattias Schirren 氏がブルーノ・タウトが1920年5月5日にヴァイマルのバウハウスで行った講演について

報文を寄稿している。講演の内容はタウトが1914年に行われたケルンのドイツヴェルクブンドの展覧会に出展したガラスの家についてであった。ガラス建築のファンタジーについて講演を行った。

### 4. タウトが日本にバウハウスを創ろうとした

タウトはナチス政権を逃れ、亡命のような形で来日し、1933年5月3日から1936年10月15日離日するまで、3年と5ヶ月を日本で過ごした。そのうち1934年8月1日から1936年10月8日まで、およそ2年3ヶ月を高崎市郊外の少林山達磨寺の「洗心亭」で過ごした。この時のスポンサーは井上工芸所を営む井上房一郎氏であった。1934年12月10日付タウトの日記に次のように記されている。“「タウト学校案」を書きあげ、京都の上野君<sup>1)</sup>に翻訳を依頼した。蔵田氏<sup>2)</sup>は、学校の所在地として東京を望んでいるが、井上氏はもともと少林山に「タウト研究所」を置く意向である。この学校はできるなら来春から開きたい。住職の広瀬さん<sup>3)</sup>は、真面目に勉強する志望者だけに来てほしいと言っているが、これも尤もな意見である。後者は達磨寺の大講堂を当てるつもりだ。”

この学校の案は文献 4 に次のように記述されている。

#### 一般方針

学生は、大学あるいは高等工業学校などの卒業試験を終了したのちにもなほ実際生活に対して、ある種の恐怖を抱くのが常である。これは日本にのみ限られた現象ではない。そこで本校はかくの如き学生に建築家として実務を処理する方法を教え、件の恐怖を除去せんとするものである。またこれによって学生の知識及び能力の拡充発展を図り、特に実務上の欠陥を補正することを目的とする。

#### 4-1. 入学資格

本校に入学する学生は、専門学校或いは大学の過程を修了せると実務或いは自修によってこれに相当する学力を習得せるとを問わず、既に一定程度の知識及び能力を所有することを必要とする。実際的若しくは芸術的無能力者は入学の資格を有しない。また入学後と言えども不適格者は退学を命ずる。初学者は、原則として入学を拒絶する。但し特に優れた才能を有する者はこの限りでない。建築現場或いは工場で実務に従事した経験ある青年は特に歓迎する。最大収容人員は20名である。

本校の建築科長は入学許可に先立ち志願者を考試し、また入学後と言えども不適当と認める学生を随時退学せしめる権利を留保する。この場合、既に学生に要した費用は返還せしめない。

#### 4-2. 学習方法

学習方法には演習の形式を用いる。すなわち、学生全員が一個の課題を研究の対象とするのである。例えば住宅の設計には、実際の建築住宅を選び、これについて最初の見取り図から決定的な設計図の作成、細部、費用計算、引込、暖房装置、下水道、家具及び諸他一切の設備に及ぶまで大小の作業を余すところなく実施する。如上の作業に際しては一切の細部及び一切の問題が検討し、研究せられる。学生は数班に分かれてそれぞれ部分的作業に従事し、必要な文献を研究し、また工場及び建築現場を見学する。

学生は、自己の趣味と素質とに応じて部分的作業をみづから選択することができる。すなわち実務に興味を有する者は構造、費用計算、現場監督等の作業に従事し、芸術的才能に富むものは専ら建築の美学的問題、工芸若しくは装飾に関する事項、透視図等を研究する。

各班若しくは各学生は、全演習参加者に研究の成果を発表してこれを全体の批判に附し、各参加者に他社の研究成果を知悉せしめる。即ちこれによって各参加者は、住宅建築に関する一切の実際的及び芸術的問題について包括的な知識を得るのである。

#### 4-3 教授要目

原則として、1（若しくは若干）の実際に施工せられる建築を教授の基礎とする。演習参加者全員が公的な懸賞募集に応募することもあり得る。演習の建築事務所の作業に類似するが、いかなる問題をもあらゆる観点から学問的及び芸術的に検討し、然るのちに究極の決定を与える点に相違がある。要するに目的は、学生が何故にかくありそれ以外であってはならぬかといふ理由を認得するにある。

- (1) 建築現場及びその地理的、交通的及び都市計画的関係、それに関連せる諸問題、特に都市計画的問題の攻究。
- (2) 全般的平面計画。これに関連して工事の順序、居住者の生活様式及び全体的な機能の研究。この場合に伝統的家屋、近代的生活及び特に風土の研究が必要である。
- (3) 構造及び費用の問題。諸種の建築構造とこれに対応する費用の問題。
- (4) (1)~(3)より生じた結果を基礎とする平面図。
- (5) 同上の建築
- (6) 詳細図は全て縮尺 50 分の 1 及至原寸。ここの問題の科学的研究を含む。
- (7) 下水道、暖房、通風、上水道、瓦斯、電気に関する問題の攻究。
- (8) 台所、浴室、便所その他の設備。

(9) 床、天井、壁などの材料及びその色彩。

(10) 金具類の部分品。

(11) 掃除、家政及びこれに要する費用、居住者数などの問題。

(12) 家具及び電気器具並びにカーテン、絨毯、クッション等の小工芸品。

(13) 外壁、道路、垣若しくは生籬その他。

(14) 庭

(15) 費用概算、契約、費用清算、建築法規。

(16) 現場監督

一戸の住宅を教授の基礎とする場合は、該住宅の建築区域がその環境に与える実際的及び芸術的效果を認識する絶好の機会を与える。演習が1ケ年（勤勉であれば半年）で1戸の住宅建築工事を完成したならば、更に別個の建築、—例えばジードルング、校舎、事務所、官衛、病院、工業建築物等を研究課題とする。かくして学生は初歩の実際知識を修得し、これを基礎として漸次その知識を発展せしめ得るのである。

これに続き、4.教授方法、5.演習期間及び校舎の所在地、6.条件 7 卒業証書及び規律、が記述されている。この案が作成されたのは1934年12月9日で、記述されたのは少林山洗心亭となっている。

#### おわりに

このタウト学校案は資金提供予定者であった井上房一郎により、拒絶され、実施に至らなかった。この成り行きは1935年1月1日のタウトの日記に記述されている。タウト学校設立案を井上房一郎が元日に断りを入れたので、タウトは気分を損ねたようである。

しかしブルーノ・タウトは日本にバウハウスのような学校を創ろうと試みていた事は事実である。

#### 参考文献

1. Magdalena Droste, Bauhaus, Taschen
  2. M. Wingler, Das Bauhaus, Dumont
  3. Jeannine Fiedler, Peter Feierabend, Bauhaus h.f. Ullmann
  4. タウト全集第3巻、美術と工芸、育生社弘道閣
  5. 日本・タウトの日記 1934年、篠田英雄訳、岩波書店
  6. 日本・タウトの日記 1935年、1936年、篠田英雄訳、岩波書店
  7. Peter Bernhard, Bauhaus Vorträge, Gastredener am Weimarer Bauhaus 1919-1925, Bauhausarchiv, Gebr. Mann Verlag
- 註
- 1) 上野伊三郎、建築家、日本イターナショナル建築会会長
  - 2) 蔵田周忠、東京高等工芸学校建築科教授
  - 3) 広瀬大蟲少林山達磨寺住職